

農林水産省食料産業局長賞

『アレルギーと給食』

愛知県豊橋市立富士見小学校 四年二組 女子 中山夕夏

小学生になったとき、給食の時間は、わたしにとってあまり楽しいものではありませんでした。なぜなら、給食は、わたしがみんなとちがうと感じる時間だったからです。

わたしは、よく言われる言葉が二つあります。ひとつは、「かわいそうだね。」です。なぜならわたしは、アレルギーをいろいろ持っているからです。食べ物や動物、日光に対してアレルギーを持っています。ショックを起こしてしまう食べ物もあります。だから、アレルギーのない人と比べると、いろいろ大変なことがたくさんあると思われるから「かわいそう」だと言われます。

二つ目の言葉は、「いいね。」です。特に給食の時間によく言われます。わたしは食物アレルギーなので、みんなと同じものを食べることができない時があります。その時、代わりのおかずを持っていきます。みんなはそれを見て、「食べたくないものを食べなくていいな。」「家からすきなおかずを持ってくることができていいな。」と思うようです。確かに、代わりに持っていく食べ物にはわたしがすきな物が多いです。けれど、食べたくないから、きらいだから、給食を食べないわけではありません。給食の時間の「いいね。」は、なんだか、自分がだめな気がして、悲しい気持ちになっていました。

「給食」の時間は、わたしがアレルギーであると思い知らされる時間です。みんなと同じふうがよかったと言ったことがあります。きつと、お母さんが一番、そう思っているに違いないのに、お母さんをこまらせたと思えました。でも、お母さんは、なんとも思っていないようです。お母さんは、わたしのアレルギーは体質なのだから仕方がない、個性みたいなものだから、どうどうとアレルギーがあると言えればいいと言います。そうすることは、自分を守ることだと言います。そしてアレルギーがあるからこそ、いろいろなことに気を付けることもできるし、アレルギーのある子の気持ちもわかってあげることができると教えてくれました。それから、わたしは、アレルギーであることをしっかりと伝えるようにしています。そこで、気づいたのは、わたし自身がみんなとちがうことを気にしすぎていたことです。

ともだちは、わたしのアレルギーを理解してくれています。学年があがることに「かわいそう。」と言われることも少なくなりました。アレルギーのあるわたしを自然に受け入れてくれているからだと思います。

四年生になった今、給食は楽しいです。みんなと同じものを食べる「ことがいいこと」ではなく、みんなと楽しい時間を過ごすことが大切だとわかったからです。